

成果報告書

2023年 4 月 9 日

公益財団法人 乃村文化財団 理事長 渡辺 勝 様

貴財団の助成金事業についてご報告します。

助成区分	教育普及活動助成	
研究および教育普及活動の期間	2022年 4 月 ~ 2023 年1 月	
フリガナ		
大学（研究室等）名 学会・博物館名	井の頭自然文化園	
フリガナ	イマムラ ヤスオ	職名
代表者名	今村 保雄	理事長
フリガナ	ヒジカタ ウラカ	職名
担当者名	土方 浦歌	学芸員
所在地	武蔵野市御殿山1-17-6	
対象となる研究および教育普及活動の概要	【テーマ】	「朝倉文夫と北村西望-二人の関係性」展
	【目的】	記念館空間の展示の可能性を探究する。個人美術館同士が相互に作品を交換しあい、同時代の二人の彫刻家のライバル関係と同盟関係を考察する展覧会コンテンツを展示空間に効果的に配置、組み込んでいく。
	【実施体制】	井の頭自然文化園学芸員と朝倉彫塑館学芸員の二人
	【実施方法】	学芸連携事業
	【成果と社会的効果】	二館開催の展覧会（9月15日～1月23日）、相互ギャラリートーク（9月26日、10月10日）、両館の常設展とともに二人の彫刻家の実態について認知されたこと
共同研究者等の有無	なし・○あり（人数 名） 戸張泰子 朝倉彫塑館 学芸員	
助成金額	50 万円	主な使途 作品運送費

<p>研究室名 学会・博物館名</p>	<p>井の頭自然文化園</p>
<p>テーマ</p>	<p>「朝倉文夫と北村西望－二人の関係性」</p>
<p>【目的】</p> <p>近代彫刻家の北村西望と朝倉文夫の二人の作品を展示して、二人の影響関係の変遷を作品と解説でご覧いただく展覧会です。また、どちらも自宅アトリエを改装した、個人美術館的な性格を持つ朝倉彫塑館と井の頭自然文化園彫刻園で、それぞれ作品を交換して二箇所で開催を行いました。</p> <p>朝倉文夫と北村西望は、ともに開始されたばかりの文展で彫刻家として認められ、同年に東京美術学校で教鞭をとり、お互い帝展審査員としてライバル同士切磋琢磨しながら「官展アカデミズム」と呼ばれていました。太平洋戦争中は「銅像救出委員会」を組織し、戦後は日展の民営化に対処していきました。朝倉文夫のライバルは、長年高村光太郎といわれてきました。が、美術学校在学中から、塑造科教師や審査員時代、戦後の日本彫塑家倶楽部時代まで、最も接点が多く、且つ当時の彫刻家たちにも影響力があったのは、この二人の関係からの動向でした。本展は、そのような二人の青年期から晩年までの関係性を検証することで、近代彫刻史への影響の見直しを行いました。また、これら二つのコレクションは、芸術家自身によって自宅アトリエ共に自治体に寄贈さじ通った経緯があります。二館開催にすることでコレクションを有機的に連結し、それぞれの常設作品も理解を促すことが目的になっています。</p>	
<p>体制</p> <p>井の頭自然文化園彫刻園学芸員と朝倉彫塑館学芸員の二人で、それぞれの館で扱うテーマを大まかに決めました。本展は、総合的なひとつのテーマを二箇所で開催するというよりも、それぞれの交換して借用した作品が、常設作品とアトリエ環境で効果的に見せられることを重視しました。《加藤清正公像》（1935年）、《加藤清正像》（1937年）や《平和来》（1952年）《平和祈念像》習作（1952年）などの、同時期同テーマの作品をどのように制作したか、実作品を比較できるように展示しました。会期中には、両館で相互ギャラリートークをそれぞれのお題を出し合いながら実施しました。朝倉彫塑館では、「朝倉文夫にとって平和祈念像とは何だったのか？」という部分で、両者の視点で説明しました。井の頭自然文化園では、「朝倉文夫と北村西望の二人は結果として当時の彫刻界にどのような影響を与えたのか？」というもので、スライドレクチャーを交えながら両者の視点で話し合いました。それぞれの美術館の特性や考えを出しながら、二人の彫刻家の特徴なども感じ取ってもらえるような二館開催展になるように決めました。</p>	
<p>【実施方法】</p> <p>朝倉彫塑館での相互ギャラリートークは、台東区ケーブルテレビと合同で開催されました。</p> <p>ギャラリートークはケーブルテレビで動画になり朝倉彫塑館のHPに掲載されました。井の頭自然文化園の相互ギャラリートークは、一般参加者を募った。美術館・博物館は、展示現場でこそ本物にふれることができるので、「ギャラリートーク」方式にして、展示物と説明の物理的な距離を近づけた教育普及方法をとりました。また、井の頭自然文化園の「二人の関係性」展は、B館とアトリエ館の二つのスペースに及ぶので、一枚でわかるようなセルフガイド形式の解説シートを現場に設置しました。ただ前情報なく雰囲気を楽しみたい人と、作品の説明を読みたい人と、展覧会には二種類の来場者がいるために、どちらでも選べるようにしました。来場者は、年配層とまた親子連れも多いため、アナログな教育普及ツールを採用してみた。また、ギャラリートークとは別に、井の頭自然文化園では展覧会ダイジェスト動画を制作しオンラインで視聴可能にしました。ただ、代表的な作品《加藤清正》と《平和来》は、ダイジェスト動画には入れず、展覧会に来場しないと実見できないようにしました。</p>	

研究室名 学会・博物館名	井の頭自然文化園
テーマ	朝倉文夫と北村西望－二人の関係性

【研究・教育普及活動の成果】

教育普及活動としては、1. 据え付け式の展覧会解説シートを配布し、関心のある来場者がシートを持って展示作品をめぐることができるようにしました。「二人の関係性」理解としては、同一テーマの競作作品の比較、あるいはライバル時期の表現の比較、同盟関係の時期の表現の比較、の三つの観点で展示作品を見て特徴がわかるような作品を選定しました。とりわけ、1950-60年の北村西望と朝倉文夫が私的な交流を持ち始めた時期は、二人の作品の特徴が大きく離れていき、相手の芸術作品への対抗心が無くなったこと、1918-20年代のライバル時期の方が写実的な人体表現が近かったことなどが、解説シートを読んでわかるようにしました。2. 動画やメディアによる教育普及活動。井の頭自然文化園彫刻園オンラインにて、教育普及用のダイジェスト動画を掲載しました。また朝倉彫塑館では、台東区ケーブルテレビと連携してギャラリートーク広報動画をオンラインに掲載しました。これらは、展覧会の要旨をダイジェストで伝え、また旧自宅アトリエに両者の作品を展示した環境ごと、伝達することに役立ったと思われます。3. さらに突っ込んだ内容にアクセスするために、10月11日に、井の頭自然文化園にて学芸員の相互ギャラリートークを開催しました。こちらは、スライドレクチャーを含んだ専門的な意見交換の機会にして、北村西望と朝倉文夫の関係性の話のみならず、二人が官展で果たした影響力などを彫刻史の流れから解説する機会にしました。「官展アカデミズム」の呼称が、実は日本美術院ら在野の人たちから呼ばれたもので、北村西望と朝倉文夫自身は、アカデミズムを志向していなかったことなどが新に見直される機会になりました。展覧会を通じて、このような新たな知見が明らかになりました。4. 毎週土曜日の定例ギャラリートークを開催しました。人間がガイドを行うことで、誰でも気軽に参加でき、鑑賞者とインタラクティブな情報交換ができました。



研究室名 学会・博物館名	井の頭自然文化園
テーマ	朝倉文夫と北村西望－二人の関係性

【今後の成果の活用と活動の展開について】

- 「北村西望」単独では、どのような芸術家でどのような時代の人かのか今まで一般の方々にはわかりにくいという意見があったのですが、「朝倉文夫同期の友人にして好敵手」という切り口ではじめて認識したという人も多かったように思います。今後の成果の活用としては、同時代彫刻家で石膏原型が全部残っているのは、北村西望と朝倉文夫くらいなものなので、戦前の石膏原型の他館への貸し出しならびに普及などの効果は見込めると考えています。また、それぞれの館の石膏原型やブロンズの保存状態の情報交換なども行われ、同年代の似たような経年変化を遂げた作品類の、今後の展示環境の基準も見えてきました。（屋外彫刻にはコーティング、100年前の石膏はケースに入れる、など）
- 今後の展開としては、朝倉文夫、北村西望と並んで「文展の三羽ガラス」と呼ばれていた建島大夢の作品と組みこんでいくことが考えられます。建島大夢の作品は、数点が和歌山県立近代美術館に寄贈されている以外は、四散しておりまとまった資料などもほとんど残っていません。（東京大空襲で日暮里の自宅が全焼した）むしろ、朝倉文夫や北村西望の手記や自伝、作品などの方に、建島大夢の失われた作品類が窺える証拠などがあると考えられます。
- 記念館空間の展示の可能性として、これからも小館や寄贈コレクションの倉庫などと相互事業として、点と点を線でむすぶような、合理的で最小限の作品移動、複数箇所での展示を鑑賞者が移動して鑑賞するような、展覧会活動を展開していきたいです。